



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	北海道帝国大学国防訓練部航空班の学生・生徒について
Author(s)	山本, 美穂子; Yamamoto, Mihoko
Citation	北海道大学大学文書館年報, 21, 52-66
Issue Date	2026-03-31
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/99410
Rights	(c) 2026 Hokkaido University Archives
Type	departmental bulletin paper
File Information	03_yamamoto.pdf



< 研究ノート >

北海道帝国大学国防訓練部航空班の学生・生徒について

山本 美穂子

はじめに

「北大滑空部 16.9.5」と記載された写真から始まるアルバムが、北海道大学大学文書館所蔵の沿革資料のひとつにある。アルバムには、1941年9月～1944年6月に撮影した写真が貼られ、丸帽を被った生徒と角帽を被った学生が、滑空機（グライダー）や軍の操縦練習機とともに写っている。アルバムの作製・旧蔵者は佐々木光朗氏で、北海道帝国大学に1941年4月～1946年10月在学し、戦時期の学生生活を経験した人物である。佐々木氏は、1941年4月予科（工類）に入学して1943年9月に修了、1943年10月工学部機械工学科に進学し、1946年9月同学部を卒業している。後に、『上出会 上出飛行士と教え子の記録』（上出会、1985年）¹⁾、『わが青春 北の空に翔ぶ』（私家版、1994年）を編著した。

北海道帝国大学には、学生・生徒を通常会員、総長・教官を特別会員とする全学的な学友会組織「文武会」があり、1940年4月現在で、文化部を6団体（文芸部、新聞部、講演部、音楽部、美術部、共済部）、運動部を18団体（柔道部、剣道部、弓道部、角道部、射撃部、陸上競技部、水泳部、山岳部、馬術部、野球部、庭球部、籠球部、ア式蹴球部、ラグビー蹴球部、スケート競技部、ホッケー部、スキー部、ポップスレー部）擁していた²⁾。しかし、文武会には、「滑空部」という団体が見当たらない。その後、文武会は1941年2月に「報国会全学会」が発足して解散となり、同年9月には「報国隊」が結成され、学生生徒の課外活動が戦争体制下に組み込まれていった³⁾。

そこで、本稿では、「北大滑空部」と考えられる団体を『北海道帝国大学新聞』、大日本飛行協会編・発行『航空年鑑』を典拠として探索し、滑空機（グライダー）から軍機の操縦要員へと変わっていく様子を、アルバムの写真を辿りながら、前掲『上出会 上出飛行士と教え子の記録』、『わが青春 北の空に翔ぶ』に寄せられた学生・生徒の回想と照らし合わせていくこととする。

1. 学生航空研究会の発足（1938年）

「北海道帝国大学学生航空研究会」は、大日本飛行協会編・発行『航空年鑑 昭和十五年』（1941年、392頁）に拠れば、1938年1月31日創立、所在地は「学生課」、部員は30人、事業は「機関紙、航空展覧会、映画会其他」、滑空場所は「札幌飛行場」、機材は「プラマ

リー機 発動機二台 サルムソン式二 A 二型機体一個」、代表者は池田芳郎、寺坂淳、指導者は東武一郎（一級滑空士）との記述である。1940年10月現在の「学校グライダー部」の一枚として記載されている。

当時のグライダーは、初級機（プライマリー）、中級機（セコンダリー）、高級機（ソアラ）の3種類があり⁴⁾、大学キャンパスの北端に接する札幌飛行場（北24条西9丁目以北）で、同飛行場の滑空士（東武一郎）の指導を受けて、初級グライダー1機で滑空訓練を行っていたことがうかがえる。2人乗り複葉機のサルムソン2A2は、北海タイムス社航空係（1926年設立）が所持する機体を、航空工学のために参照したものと考えられる。代表者である池田芳郎は、理学部の物理学第二講座担任教授で理論物理学を専門とし、工学部の理学第一講座も兼任、物理学・数学・力学の講義を担当していた⁵⁾。飛行機の翼の揚力の機構、プロペラの理論、タービンの理論について、『流体力学と翼並に水力機の理論』（加藤鉞郎共著、内田老鶴圃、1929年）を著した物理学者・数学者でもある。一方、寺坂淳は、工学部機械工学科の学生である。

学生航空研究会の1938年創立の背景は、『北海道帝国大学新聞』の「グライダーを本学にも寄贈 仁丹本舗から」（1938年1月11日付、2面、図1）、「やつと誕生する航空研究」（1938年1月25日付、3面）の記事からうかがえる。森下仁丹株式会社社長が「航空思想普及」として練習用グライダー15機を全国の中学校・大学に対して寄贈するにあたり、学生課の「尽力」で北海道帝国大学に1機寄贈されるに至った。学生課が主導し、工学部の一部の学生の間で「航空研究会組織の機運濃厚」とも伝えている。さらに、予科工類の生徒、工学部鉱山工学科の学生といった工学系の学生・生徒が主唱し、配属将校の岸川健一陸軍歩兵大佐が工学部教授等に「遊説」、協議をして創立に至ったという。学生課・配属将校が設置に至らしめた学生航空研究会は、北海道帝国大学文武会に属する団体ではない。



図1 グライダー受贈を伝える新聞記事（1938年1月11日付『北海道帝国大学新聞』）

その後、『北海道帝国大学新聞』が伝える航空関連の記事は、グライダーから航空研究会（クラブ）へ、さらに、「海軍予備航空団 札幌支部開設に際し」（1939年7月25日付、1面）、「航空団で団員募集 行かう大空へ！ 学生同乗飛行、講演等盛沢山」（1940年9月17日付、3面）などと海軍に焦点をあてた記事へと変化する。

海軍予備航空団は1939年4月10日に札幌支部を新設し、大学卒業後に海軍航空予備学生（飛行科）となる学生・生徒を団員として募り、訓練した。前掲『航空年鑑 昭和十五年』（390頁）には、1940年11月現在、札幌支部学生団員は15人と記述はあるが、訓練は間もなく中止となった。学生団員には、松本直（工学部電気工学科）、塩野谷信行（農学実科）、鎌島公男（農学実科）、金子由太郎（土木専門部）がいた⁶⁾。入団の契機について、松本直は、1940年の春頃、「海軍札幌人事部の恰幅の良い大佐殿が北大に来られ、『スポーツをする積りで飛行機に乗らないか。無料である。卒業後の義務は一切ない。』などという話をされ、操縦訓練生を募集された」と回想している⁷⁾。

表1 『北海道帝国大学新聞』紙面における滑空・航空関連記事（1937～1942年）

記事見出し	発行年月日
海洋飛行団支部本学に設置案	1937.8.17
グライダーを本学にも寄贈	1938.1.11
やつと誕生する航空研究会	1938.1.25
グライダー初の練習	1938.5.10
初のグライダー競技に本学優勝す	1938.6.14
グライダー夏期講習会	1938.6.28
海軍予備航空団支部札幌設置確定す	1938.10.11
航空映画講演の夕べ	1938.11.22
海軍予備航空団札幌支部開設に際し	1939.7.25
航空団で団員募集	1940.9.17
滑空機と気象 稲川幸智	1942.2.17
滑空訓練より帰りて 大根善次	1942.3.17
草原にみなぎる敢闘と自律の精神	1942.4.28

2. 国防訓練部航空班への改編（1941年）

北海道帝国大学文武会は1941年2月に「報国会全学会」が発足して解散となり、報国会全学会には総務部、国防訓練部、厚生部、文化部、鍛錬部の5部が設けられた。1941年4月22日付『北海道帝国大学新聞』1面に掲載の「全学会機構」略図では、国防訓練部航空班の班長（池田芳郎）、副班長（小林種樹）と記述がある。報国会には学部・予科・実科・専門部毎に分会があり、予科分会「櫻星報国団」にも「航空班」があった⁸⁾。同年9月15日、「北海道帝国大学報国隊」の結成式が中央講堂で行われた。報国会全学会の秋季大会

の役員表には、国防訓練部に航空班、射撃班、騎道班、自動車班があり、農学部水産学科2年の杉本稔（1942年9月25日卒業）の名前が見られる⁹⁾。

大日本飛行協会編・発行『航空年鑑 昭和十六・七年』（1943年）によれば、1942年9月現在の「学校報国団航空班一覧」（445頁）として、「北海道帝国大学国防訓練部航空班」は、1938年1月31日創立、所在は学生課、代表者は池田芳郎、福田孝平と記述がある。一方、「大学・高専航空錬成団」（493頁）としても記述があり、創立は1938年2月15日、事業は班内を「操縦部」、「滑空部」、「技術部」の3部に分けて、大日本飛行協会に委託して各技術の「練磨」を行ない、班員相互により理論的研究を行なうと記述がある。班長は池田芳郎、航空班主任幹事は福田孝平（工学部学生）、所在は学生課第三係内である。両記述をあわせて、予科・実科・専門部の生徒と学部 학생を班員とする「国防訓練部航空班」が、学生課を基盤として存在していたことがうかがわれる。

ただ、『上出会 上出飛行士と教え子の記録』、『わが青春 北の空に翔ぶ』を見る限り、1941～1942年にグライダー訓練をしていた学生・生徒たちは、「国防訓練部航空班」といった名称では回想していない。

図2～図6は、1941年9月5日に、札幌飛行場で初級グライダー（プライマリー）の訓練をしている工学部学生・予科生徒たちである。図2が、「北大滑空部 16.9.5」と表記された写真である。写っている学生・生徒たちは表1のNo.1～No.19で、No.20以降も当時グライダー訓練をしていた生徒たちである。予科（工類）の生徒が圧倒的に多い。

1941年に予科（工類）に入学した佐々木光朗は、「昭和十六年四月に北大予科に入った時、運動部への入部勧誘のなかに滑空部（グライダー部）があるのを見つけ、早速入部した。小林種樹教授が部長だったが、実際の指導者は、工学部機械科三年の寺坂淳氏及び予科工類二年の近藤禎男氏の二人だった。二人とも二等滑空士の免状を持っていたという」と回想している¹⁰⁾。一方、同期で予科（農類）の生徒であった中川淳二は、「北大予科に入学し、昭和十六年に運動部のひとつである航空部に入った。当初の航空部はグライダーの訓練だけであり、出来たての部であったから人数も少なく、極めて和やかな部であった」と回想している¹¹⁾。宮手敏男も「昭和十六年北大予科に入学。運動クラブの選択に当り・・・滑空班に入りました」と回想している¹²⁾。佐々木光朗は「滑空部」、中川淳二は「航空部」、宮手は「滑空班」と記憶し、3人ともグラダーに乗ることは運動部のひとつに入るという認識であった。

表2の学生・生徒たちのグライダー訓練は、佐々木光朗によれば、1941年4月末から、土曜日午後・日曜日・休日に、札幌飛行場で行ったという。初級グライダー（プライマリー）は人力で空中に引き上げるため、牽引要員としても、訓練に加わる生徒たちが必要であった。



図2 プライマリーと「北大滑空部」の工学部学生・予科生徒たち(1941 年 9 月 5 日)



図3 プライマリーへのゴム牽の装着 (1941 年 9 月 5 日)

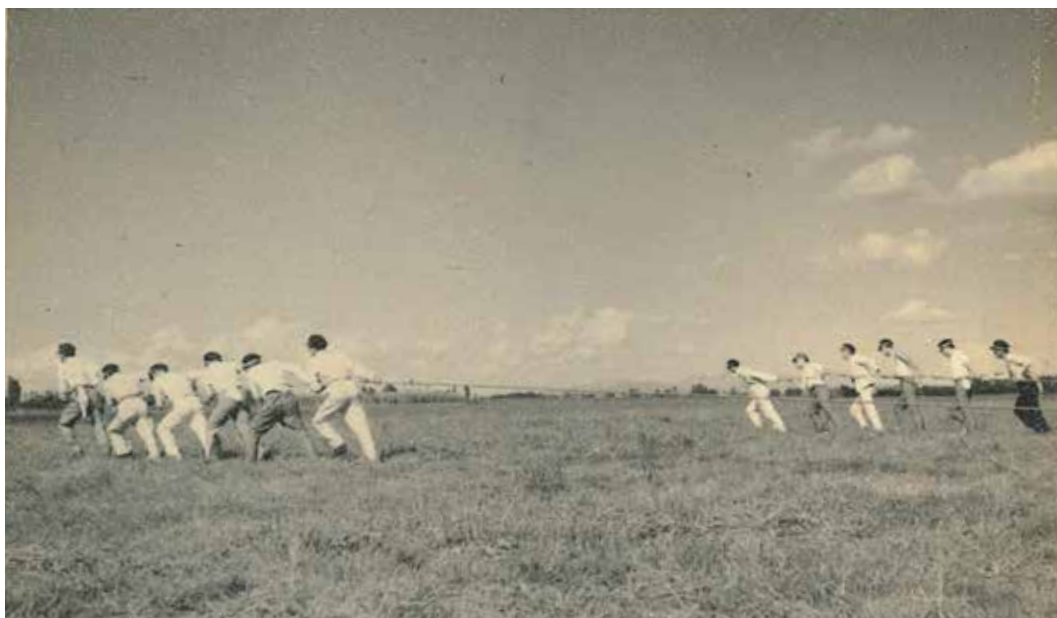


図4 プライマリーを空中に引き上げる牽引作業（1941年9月5日）

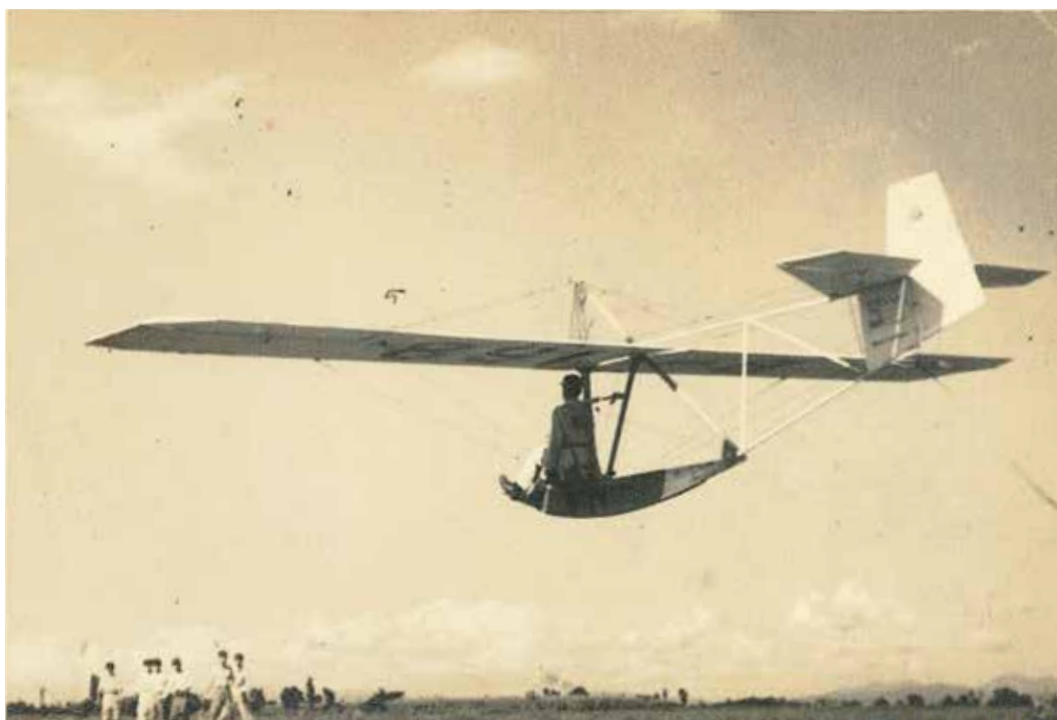


図5 飛び立ったプライマリー（1941年9月5日）



図6 リヤカーにのせたプライマリーの運搬（1941年9月5日）

表2 1941年にグライダー訓練をしていた北海道帝国大学の学生・生徒一覧

No.	学生・生徒名	所属学部・課程	役割
1	寺坂淳	工学部機械工学科	指導者（二等滑空士）
2	秋野了	予科（工類）	訓練者
3	棟徹夫	予科（工類）	訓練者
4	浅見信	予科（工類）	訓練者
5	瀬川浩	予科（工類）	訓練者
6	近藤禎男	予科（工類）	指導者（二等滑空士）
7	松居勝広	予科（工類）	訓練者
8	大光寺宏	予科（工類）	訓練者
9	鈴木秀次	予科（工類）	訓練者
10	佐藤（宮手）敏男	予科（工類）	訓練者
11	八木陽一郎	予科（工類）	訓練者
12	村岸嘉幸	予科（工類）	訓練者
13	佐々木光朗	予科（工類）	訓練者
14	齊藤洋之	予科（工類）	訓練者
15	秋谷元	予科（工類）	訓練者
16	岡田克己	予科（工類）	訓練者

No.	学生・生徒名	所属学部・課程	役割
17	中川淳二	予科（農類）	訓練者
18	宮原幸則	予科（農類）	訓練者
19	稲川幸智	予科（農類）	訓練者
20	倉田栄喜	予科（工類）	訓練者
21	臼杵栄	予科（工類）	訓練者
22	岡光	予科（工類）	訓練者
23	村岸嘉行	予科（工類）	訓練者
24	皆川葉一	予科（工類）	訓練者
25	戸田守二	予科（工類）	訓練者

注）アルバムへの書き込み、『わが青春 北の空に翔ぶ』（1994年）の回想による。『北海道帝国大学一覧』の学生生徒名簿と照合した。

3. 大日本飛行協会札幌訓練所での操縦訓練（1941～1944年）

1941年10月、札幌飛行場に大日本飛行協会札幌飛行訓練所が開所した。前掲『航空年鑑 昭和十六・七年』において、北海道帝国大学国防訓練部航空班は、大日本飛行協会に委託して、操縦・滑空・技術（整備）の練習を行なうとの記述は、この大日本飛行協会札幌飛行訓練所での訓練を指している。

大日本飛行協会『訓練生心得』（全16頁、懐中冊子）¹³⁾では、訓練生は、「大日本飛行協会飛行訓練生採用規定ニ依ル資格ヲ有シ当該飛行訓練所採用試験ニ合格シ訓練生ヲ命セラレタル者」であり、「操縦訓練」、「滑空訓練」、「整備技術訓練」に分かれて行ない、天候等で飛行不能の場合は機械工術、飛行機学、発動機学、航空気象学、航空法規、空中航法などの学科教科を修得した。航空訓練は、通常毎週土曜日、日曜日、祝祭日に行ない、夏期休暇、その他学業の余暇などを利用して「特別合宿訓練」も実施した。飛行訓練期間は概ね2年6ヶ月、第1年次は九五式三型練習機による同乗飛行訓練、第2年次は九五式三型練習機による単独及び編隊訓練、第3年次は九五式一型練習機による飛行訓練を行ない、派遣将校が行なう検定に合格させることを目的とした。服装は、所属学校の制服を着用し、「飛行訓練生章」を左襟部に佩用した。操縦訓練を実施する時は、航空被服、航空帽、航空靴、航空手袋などが訓練所から貸与された。指揮官（主任教官）、教官（助教）が訓練生を指導した。

佐々木光朗は、1941年秋から、大日本飛行協会札幌飛行訓練所の「操縦訓練」を受けた。「北大グライダー部員としての訓練で札幌飛行場へ通っているうちに、飛行協会札幌訓練所が設立され飛行機の操縦を口ハで教えてくれるという耳よりな話を聞いた。自分にとっては中学時代からの夢であった飛行機に乗れるというので早速に移籍することにした」といい、「操縦部への転科」と表現している¹⁴⁾。練習機は、「たまたま二～三年前に閉

鎖した海軍の札幌海軍予備航空団が札幌飛行場で学生訓練用に使っていて、そのまま置いていった海軍三式練習機数機を譲り受け、それを使つての訓練」が始まった¹⁵⁾。主任教官は、北海タイムス社航空係として活躍していた上出松太郎（一等操縦士・二等航空士・航空機関士・二等滑空士）¹⁶⁾であった。

前掲『上出会 上出飛行士と教え子の記録』巻末（259～266頁）の訓練生名簿（判明分）を参照すると、操縦訓練生は、1期（1941年入所）が23人（内、北海道帝国大学学生・生徒は18人）、2・3期（1942年入所）が15人（全員が北海道帝国大学在学者）、4期（1943年入所）が74人（内、北海道帝国大学学生・生徒は7人）、5期（1944年入所）が14人（内、北海道帝国大学生徒は2人）である。1～3期は北海道帝国大学の学生・生徒が、4期は北海道第一師範学校、5期は小樽経済専門学校の生徒が占めた。操縦訓練生となった北海道帝国大学の学生・生徒は、表3のとおりである。グライダーの滑空訓練をしていた者から操縦訓練に移った者も多く、海軍予備航空団札幌支部の学生団員であった者も確認できる。図9は1942年当時の札幌飛行場を上空から撮影した写真、図7～図8、図10～図11は1942～1943年にかけての操縦訓練生たちをおさめた写真である。

1942年秋には、飛行時間50時間以上の訓練生6人（佐々木光朗、清水純一、菅沼長雄、佐藤敏男、秋谷元、児玉清臣）が、学科試験・実地試験・体格検査を経て、同年12月4日付で「二等航空機操縦士免状」を取得した。佐々木光朗は、その後、助教として訓練生への指導も行うようになった。



図7 三式二号地上練習機による初飛行後の1期訓練生たち（1942年1月11日）

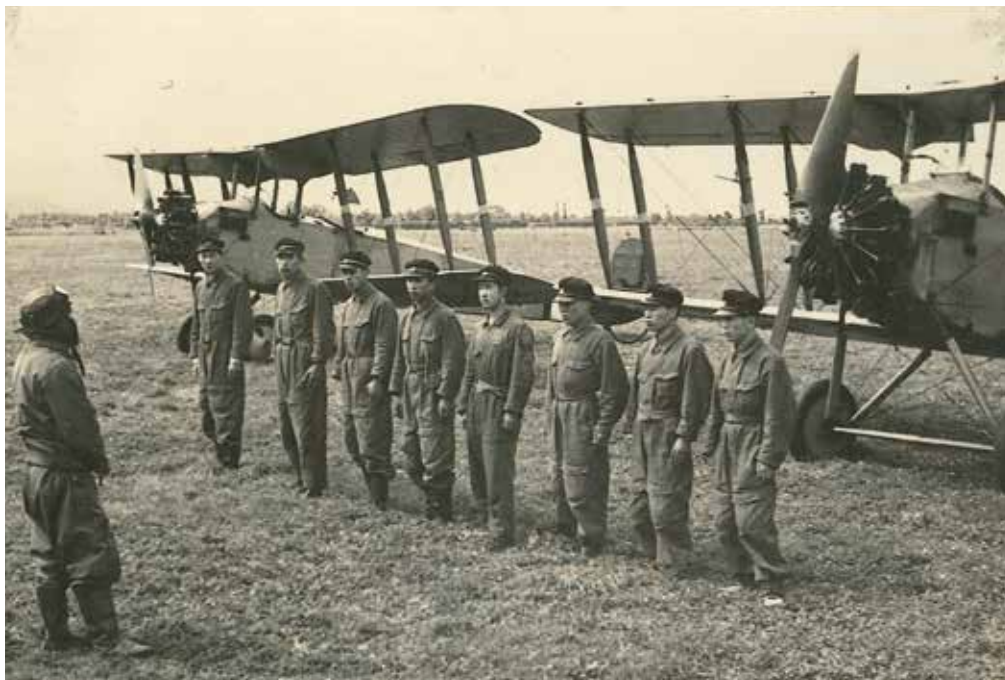


図 8 教練査閲（1942 年夏）



図 9 札幌飛行場（1942 年 9 月、陸軍九七戦中隊長奥田暢撮影）

道路は右斜めに走る北 24 条通、上端には西 5 丁目通が写り、飛行場には陸軍の九七式戦闘機が 9 機駐屯していた。



図 10 九五式一型乙中級練習機による操縦訓練 (1943 年 5 月 31 日)



図 11 札幌飛行場にて (1943 年 5 月 30 日)

表3 大日本飛行協会札幌訓練所における操縦訓練生となった北海道帝国大学の学生・生徒

1期（1941年入所）			
No.	訓練生名	卒業学科・課程	備考
1	松本直	工学部電気工学科	海軍予備航空団員
2	塩野谷信行	農学実科	海軍予備航空団員、海軍航空隊
3	鎌島公男	農学実科	海軍予備航空団員、陸軍特別操縦見習士官
4	金子由太郎	土木専門部	海軍予備航空団員
5	菅沼長雄	工学部鉱山工学科	
6	児玉清臣	工学部鉱山工学科	
7	梶山泰男	工学部機械工学科	
8	上崎一雄	工学部機械工学科	
9	高橋哲郎	工学部機械工学科	
10	清水純一	理学部物理学科	
11	戸田守二	工学部土木工学科	
12	畑行吉	工学部土木工学科	
13	大光寺宏	工学部土木工学科	
14	斎藤洋之	工学部電気工学科	
15	佐藤（宮手）敏男	工学部冶金工学科	
16	佐々木光朗	工学部機械工学科	
17	岩渕忠男	工学部土木工学科	
18	秋谷元	工学部土木工学科	
2・3期（1942年入所）			
No.	訓練生名	卒業学科・課程	備考
19	千葉寿一	農学実科	陸軍経理部見習士官
20	白崎健蔵	農学実科	陸軍特別操縦見習士官
21	和田太津美	[農学実科]	
22	土肥勇	農学実科	
23	越前清一	農学実科	
24	阿部義雄	農学実科	陸軍特別操縦見習士官
25	小滝靖	農学部林学科	陸軍特別操縦見習士官
26	安孫子和彦	工学部機械工学科	
27	岡田和男	工学部電気工学科	陸軍特別操縦見習士官
28	深澤恵	農林専門部農学科	
29	中川淳二	農学部農芸化学科	
30	中山哲之助	農学部林学科	
31	谷元臣	農学部農業経済学科	陸軍特別操縦見習士官
32	高橋達男	農学部農業経済学科	陸軍特別操縦見習士官
33	松岡和雄	工学部応用化学科	

4期（1943年入所）			
No.	訓練生名	卒業学科・課程	備考
34	奥村銀也	農林専門部林学科	
35	佐々木正	農林専門部林学科	陸軍特別操縦見習士官
36	宮原五郎	[農林専門部林学科]	
37	奥村久	[医学専門部]	
38	深瀬寛	医学専門部	
39	亀井節夫	[理学部地質学鉱物学科]	
40	菅野熙	医学部	
5期（1944年入所）			
No.	訓練生名	卒業学科・課程	備考
41	小野秀輝	林学実科	陸軍特別操縦見習士官
42	中島泉	農学実科	

注）氏名・学科等は『北海道帝国大学一覧』の学生生徒名簿等と照合した。備考欄は、前掲『上出会 上出飛行士と教え子の記録』、『わが青春 北の空に翔ぶ』内の回想による。なお、[] は在学最終確認の学科・課程である。

むすびにかえて

北海道帝国大学が1943～1944年に収受した文書の中には、「陸軍特別操縦見習士官」に関するものが散見される。そのひとつが、「陸軍特別操縦見習士官志願心得」（1943年、図12）である。1943年7月3日勅令第五六六号「陸軍航空関係予備将校補充及服役臨時特例」による「陸軍特別操縦見習士官」は、その志願者の資格を、大学令による①大学学部、②予科、③高等学校高等科、④専門学校、⑤高等師範学校、⑥師範学校、⑦上記と同等以上と陸軍大臣が認めた学校を卒業した者（1943年9月30日迄に卒業すべき見込みの者、大学学部在学する者を含む）とした。北海道帝国大学の場合で考えると、①に相当する農学部・医学部・工学部・理学部の卒業者と在学学生（1943年9月30日迄に卒業見込みの者）、②・④に相当する予科・農学実科・林学実科・土木専門部・医学専門部の卒業者と在学生生徒（同上）が対象である。陸軍特別操縦見習士官制度は、①～⑥の学生・生徒を在学中に陸軍の操縦要員として囲い込み、確保することを目的とした。今回、大日本飛行協会札幌訓練所の操縦訓練生には、彼らの回想から「陸軍特別操縦見習士官」になった者がいることがわかった。

一方、図13は「操縦部送別会」と記された、1943年10月21日撮影の写真である。前列左2人目から、送別される千葉寿一、小滝靖、岡田和男、谷元臣、高橋達男である。1943年10月在学徴集延期が停止となり、満20歳以上の学生・生徒が「臨時徴兵検査」を受検した。北海道帝国大学の在学学生については、農学部の農学科・農業経済学科・農業生物学科の学生、農学実科・林学実科の生徒が、12月に学籍を有したまま軍務につく「学徒出陣」をすることとなった。10月21日は、文部省が明治神宮外苑競技場に出陣する学徒を集め



図 12 陸軍特別操縦見習士官志願心得（1943 年）



図 13 操縦部の送別会（1943 年 10 月 21 日）

て、壮行会を開いた日と合致する。アルバムに貼られた写真を読み解くには、更なる調査が課題である。

〔注〕

- 1) 同書の市販版は、佐々木光朗（上出会）編『北の空に翔けた青春 札幌飛行訓練所と上出飛行士』（1985年、共同文化社）。
- 2) 北海道帝国大学文武会『文武会紹介 昭和十五年四月』を参照。
- 3) 北海道大学『北大百年史』通説、1982年、年表56-57頁。
- 4) 佐々木光朗『わが青春 北の空に翔ぶ』私家版、1994年、8頁。
- 5) 『北海道帝国大学一覧 昭和十六年』1941年、218・221頁。
- 6) 前掲『わが青春 北の空に翔ぶ』33頁。
- 7) 『上出会 上出飛行士と教え子の記録』上出会、1985年、205頁。
- 8) 1941年2月18日付『北海道帝国大学新聞』1面。
- 9) 1941年9月23日付『北海道帝国大学新聞』1面。
- 10) 前掲『わが青春 北の空に翔ぶ』8頁。
- 11) 前掲『上出会 上出飛行士と教え子の記録』183頁。
- 12) 同上書216頁。
- 13) 北海道大学大学文書館所蔵。
- 14) 前掲『わが青春 北の空に翔ぶ』17頁。
- 15) 同上書19～20頁。
- 16) 大日本飛行協会編・発行『航空年鑑 昭和十五年』1941年、419頁。

〔後記〕本研究は、JSPS 科研費25K0585905の助成を受けたものである。

（やまもと みほこ／北海道大学大学文書館館員）